

汚染水浄化処理について

タンク内汚染水の処理について

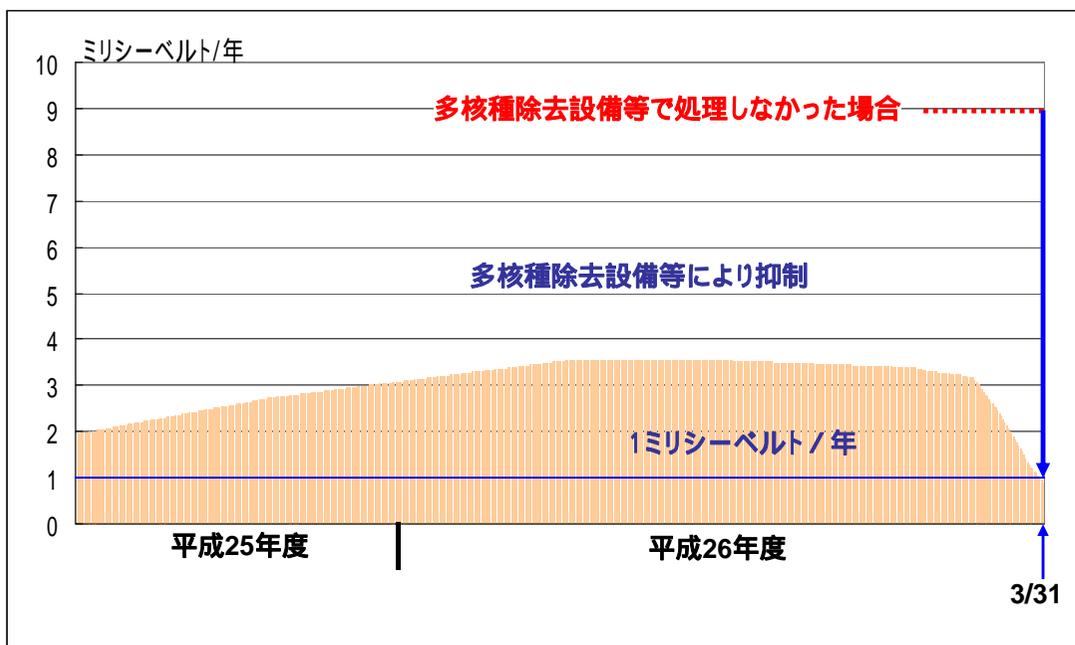
タンクに起因する敷地境界実効線量（評価値）は、今年度末に「1mSv/年未滿」を達成の見通し（RO濃縮塩水の処理は3月末時点で約8割）。

RO濃縮塩水の処理は、事故後、早い段階で発生した海水成分の多い汚染水約3%（約2万トン）を除き、5月末までに完了する予定。

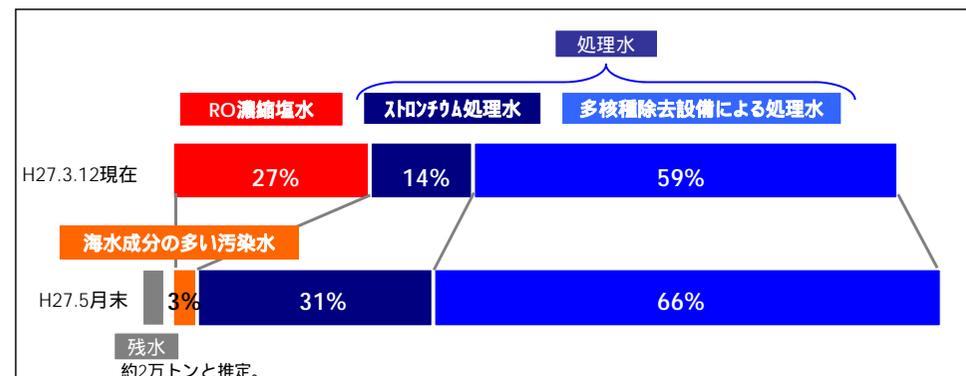
○事故後、早い段階で発生した海水成分の多い汚染水

- ・海水成分の多い汚染水の処理は、カルシウム・マグネシウムの影響で定格流量運転ができず、時間を要することが判明。
- ・処理には、さらに数ヶ月を要する見込み。

タンクに起因する敷地境界実効線量の推移



汚染水の処理状況



・処理水のさらなる浄化

多核種除去設備以外で処理をしたストロンチウム処理水については、今後、多核種除去設備で再度浄化し、さらなるリスク低減を図る。多核種除去設備で処理した水のうち、過去の装置トラブル時に浄化性能が低下した際の処理水については、再度浄化を進める。最終的な処分方法の検討に合わせ、上記以外の処理水についてもさらなる浄化を検討する。

・建屋内滞留水の継続処理

日々建屋に流入する地下水等（地下水約300トン/日＋ウェルポイントくみ上げ移送分等約100トン/日）は、セシウム吸着装置及び第二セシウム吸着装置によりストロンチウム処理水にした後、多核種除去設備で浄化を継続。今後も、地下水については、さらに対策を講じて建屋への流入量を低減するとともに、建屋内滞留水の浄化・低減にも取り組んでいく。

・タンク底部の残水

設備上、タンク底部の汚染水は、本設ポンプでくみ上げきれないため、残水が発生。残水量は、約2万トンと推定。残水処理にあたっては、安全を最優先に考え、ダストの飛散防止・被ばく防止対策等を十分に施しながら、タンク解体時に順次処理中。